

過剰, 欲望, 誘惑の行く末

—G・バタイユ『わが母』における登場人物の関わりについて

神田浩一

1. 過剰な力と欲望

ジョルジュ・バタイユ (1897-1962) の, 未完のまま放置された最後の物語⁽¹⁾ 『わが母』は, 語り手ピエールと若くて美しい母エレーヌとの呪われた愛の物語である。観念的で難解な語彙や言い回しを多用しつつ, 母との交渉を回想していく語りは, 静謐さ, 重厚さを基調とするが, 醜悪, エロティックな行為の描写や緊迫した会話のやりとりなどにしばしば切り裂かれる。その語りを通して現れてくるのは, 彗星のように燃え上がり瞬間に天空を横断していくかのような母エレーヌの鮮烈な生の軌跡である。彼女は独特な悪の哲学を抱き実践している。悪を痛烈に意識することで, 目も眩むほどにもなった〈苦悩⁽²⁾〉を抱き, それによってかえって高められた快樂に対して, 彼女は過剰に浸り込む。胸を締め付けるような〈苦悩〉に怯むことなく, 敢然と「死と腐敗の世界⁽³⁾」に身を投げ出すことが, 「世間の連中が震えている愚鈍な世界⁽⁴⁾」をはるかに超えているという務持を彼女に持たせて

(1) ガリマール版『バタイユ全集』第4巻の註釈に, 校訂者タデ・クロソウスキーは次のように記している。「1955年頃に, バタイユは『マダム・エドワルダ』のテクストを再び取り上げ(ポヴェール版の再版かオリンピア・プレスへの英語の翻訳の機会だろうか), 恐らくその時に, 『聖女』を用いて, ピエール・アンジェリック(『マダム・エドワルダ』に対して用いられた偽名である)の一種の自伝を書くことで, 続編を加えることを望んだようである。」(Georges Bataille, *Œuvres complètes t: 4*, Paris, Gallimard, 1981, p. 387).

(2) 〈苦悩〉(angoisse) は, バタイユ思想のキーワードである。物語では, 語り手ピエールと母エレーヌとの関係が問題となる際にだけ用いられ, 他の登場人物の関係, 例えばピエールとアンシーの関係には決して用いられない。

(3) Georges Bataille, *Ma mère, Romans et récits*, préface de Denis Hollier, édition publiée sous la direction de Jean-François Louette, Paris, Gallimard, Coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2004, p. 851.

(4) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 851.

いる。母は、そのような真の自分のことなど全く知らずに、信仰心の篤い息子が自分に対して抱いていた敬意を逆手にとって、息子の周りに悪徳の罟をはりめぐらせる。エロティックな写真を見るように仕向けたり、自分の同性愛の相手とつきあわせたりなどの度重なる誘惑によって、一步一步と息子を墮落させ、自分の悪の世界に引きずりこむ。最後に〈苦悩〉から生まれ、自分の悪の哲学を十分に吸収した息子との呪われた愛を成就して⁽⁵⁾自らの命を断つ。

物語は、論者によって、ギリシャ悲劇、フランス古典悲劇、フランス心理小説の系譜に位置づけられ、またサド、ジッド、プルートなどとの関連が言及されたが、何よりも『エロティシズム』（1957）に代表される後期バタイユの思想を体現した物語、言い換えれば近親相姦のタブーを扱った作品として論じられてきた⁽⁶⁾。確かに特徴的な語りの分析⁽⁷⁾、物語に現れるギリシャ、ローマ神話の要素などのテーマの分析⁽⁸⁾、精神分析的な解釈⁽⁹⁾、他のテキストとの連関、テキストの成立過

(5) 近親相姦の有無について、濱野耕一郎がバタイユの手書き原稿にあたり詳細に論じている。現在流布している版は物語の半分ほどで放棄された完成稿に近い原稿に、とりあえず物語の最後まで書かれた一つ前のヴァージョンにあたる原稿を無理やりつなげたものになっており、2つのヴァージョンの矛盾が残されたままになっている。バタイユは2つヴァージョン間で構想を変え、前に書かれたヴァージョンでは近親相姦が実際になされるのに対して、後で書かれたヴァージョン版では近親相姦は実際にはなされない。(Koichiro Hamano, «Inceste et suicide: énigmes de *Ma mère*, roman de Georges Bataille», *Études de langue et littérature françaises*, Université de Kyoto, septembre 1997, p. 103-116.)

(6) Philippe Sollers. «Le récit impossible», *Quinzaine littéraire* (11), 1^{er} sept. 1966. Repris in *Logiques*, Paris, Éditions du Seuil, 1968, 300 p. pp. 158-163. Mishima Yukio, «Essai sur Georges Bataille», *N.R.F.*, 256 avril, 1974, p. 77-82. 吉田裕『聖女たち バタイユの遺構から』書肆山田1993年。

(7) Brian T. Fitch, «*Ma mère*; le texte initiatique», *Monde à l'envers, texte réversible. La fiction de Georges Bataille*, Paris, Lettres modernes Minard, Coll. «Situation» 42, 1982 白石敬晶「ジョルジュ・バタイユ『わが母』の構造」『広島大学フランス文学研究5号』1986年, 33-42頁。

(8) Osamu Nishitani, «Georges Bataille et le mythe du bois. Une réflexion sur l'impossibilité de la mort», *Vers une sémiologie différentielle. Texte, lecture, interprétation*, t. III. Édition réunie par André Chayvin et François Migeot, Besançon, Presses Universitaires franc-comtoises, 1999, pp. 258-302.

程⁽¹⁰⁾なども論じられてきているが主流ではなかった。この論考では、語り手ピエールと母エレヌの関わり合いに焦点を当てて、『わが母』が近親相姦のタブーという枠組みから溢れ出す要素に注目したい。

なぜ母エレヌは息子ピエールを〈苦悩〉を感じつつも〈欲望〉するのだろうか。息子ピエールを愛すること、つまり人類の根源的タブーである近親相姦をなすことが、悪の哲学を標榜するエレヌにとって最もふさわしい行為になるからであろうか⁽¹¹⁾。確かに『わが母』の登場人物の〈欲望〉と〈苦悩〉に関しては、二人の呪われた愛の成就が「不可能」であることに由来すること、さらには禁止によって逆説的に〈欲望〉が喚起させられていることを示唆するような言葉がある。「僕と母の間には可能なことは何一つとしてなかった⁽¹²⁾。」「お前とわたしを結びつけるもの、わたしとお前を結びつけるものが、今後は耐え難いまでに結びついて、わたしたちは二人を結ぶものの深さによって引き裂かれるのです⁽¹³⁾。」というように、二人の〈欲望〉の成就の「不可能性」に対する絶望が、実際に何度となく二人の口のにぼっている。『わが母』の執筆と時期を同じくして上梓された『エロティシズム』(1957)の中で、バタイユは近親相姦は性に関する最大のタブーであり、それゆえその禁止は強烈であり、それゆえ、それを侵すことに狂おしいほどの魅力を与えると語っていた⁽¹⁴⁾。さらに語り手ピエールと母エレヌの〈苦悩〉は、彼らの

(9) Denis Hollier, *La prise de la Concorde. Essais sur Georges Bataille*, Paris, Éditions Gallimard, Coll. «Le Chemin», 1974, 1993. Julia Kristeva, «Bataille solaire, ou le texte coupable», *Histoire d'amour*, Paris, Denoël, 1983, pp. 341-346.

(10) プレイアッド版『わが母』の註で、ジル・フィリップがテキストの成立過程を詳細に論じている。(Gilles Philippe, «Notice», *Ma mère*, *op. cit.*, p. 1295-1305.)

(11) バタイユのテキストには、母との合一を願うファンタズムが頻出するので(『眼球譚』のマルセル、『青空』の母の死体を前にしての自慰のエピソードなど)、そこに『わが母』のモチーフの起源を見ることも不可能ではない。しかし作家のファンタズムと作品の関係は単純なものではないし、さらにテキストの成立事情を見ていくと、構想当初においては、母は息子を悪へと誘うだけで、近親相姦はテーマにはなっていなかった。また『エロティシズムの歴史』を見るとバタイユにとっては近親相姦のタブーよりも死体に対するタブーの方に関心が強かったことがうかがえる。

(12) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 809.

(13) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 814.

合一が根源的なタブーによって「不可能」とされており、その結果、ますます彼らの〈欲望〉を高め、結果として、溢れ出した〈欲望〉がタブーを踏み超えさせたと解釈できる。確かに最大の禁止を侵す侵犯行為という側面が物語に彩りを添えているだろう。

しかし『わが母』を近親相姦の物語としてとらえると、母エレーヌの次のような台詞を説明できない。

「だってわたしの中の快樂は誰のせいでもなく、それはわたし一人から、絶えずわたしの神経を苛む自分の不均衡から生じるものだからです⁽¹⁵⁾」

母の〈欲望〉は、近親相姦のタブーに関わりのない彼女自身の内面の過剰な力の湧出として表現されている。近親相姦のタブーがいかに強烈なモチーフとしてあったとしても、それだけでは登場人物の過剰な〈欲望〉と〈苦悩〉を十分説得力のあるものとはしていない。

ではピエールと母エレーヌの近親相姦の禁止というタブーから理解不可能な、そして物語ではその由来が説明されない、登場人物の抱く過剰な〈欲望〉と〈苦悩〉は、どのように解釈されるべきだろうか。実はバタイユの他の文学テキストにおいても、登場人物の〈欲望〉と〈苦悩〉には「客観的相関物⁽¹⁶⁾」が見当たらない。つまりしかるべき心理的連関性や必然性を持って物語が語られてはいないのだ。

バタイユの処女作と言っても良い『眼球譚』(1928)では、語り手「私」と主人公のシモヌは女友達のマルセルを彼らの性的遊戯に参加させることで異常なほどの性的興奮をかきたてられるが、そのマルセルを執拗に求める二人、特に、マルセルの死後も何度も彼女のことを、まるで強迫観念に取り憑かれたように想起する語り手の〈欲望〉は、物語の連関性を逸脱している(シモヌと語り手によって性的

(14) 「近親者の断念——自分が所有する物の享楽を自分に禁じる留保——が、動物的な貪婪さの対極にある人間的な態度を決定している。そして、前述したように、逆にこのような断念が、断念した対象の価値が強調される。」(Georges Bataille, *Œuvres complètes t. X*, Paris, Éditions Gallimard, 1987, p. 216).

(15) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 815.

(16) T. S. Eliot, *Hamlet, Selected essays*, London, Faber and Farber, 1932. p. 145.

な逸楽を知り、そのことを恥じて狂気へ、そして、死へと逃避する清純なマルセルには、進行性麻痺にかかった盲目の夫を遺棄して、そのために良心の呵責を感じ、正気を失う陰鬱なバタイユ自身の母が恐らくは投影されているとバタイユ本人が分析している(17)。

『青空』(執筆 1935, 出版 1957)においては、語り手トロップマンは、ダーティによって〈欲望〉を過剰に励起させられ、深い錯乱、擾乱状態に入っていくが(シモーヌ・ヴァイユをモデルにしたと言われるもう一人の女性ラザールが死の不吉な面を想起させるのと同様に、ダーティが死の徴を帯びていると示唆されているが)、テキストのレベルでは、その過剰さに焦点が当てられ説得的な理由が与えられることはない。

『C 神父』(1950)では、登場人物のロベールやシャルルが〈苦悩〉していることに対する説得的な原因に読者が会おうことはないし、ロベールがゲシュタポの拷問による自殺同然の死を迎え、さらにシャルルまでがそのかなり後で自殺することに対する説得的な根拠も見出せない。

「俺の苦悩は結局至高の絶対である(18)」という『マダム・エドワルド』(1941)の語り手の激しい〈苦悩〉に関してもその「客観的相關物」は見つけられそうにもない。

ほぼすべてのバタイユの文学テキストにおいて登場人物たちは読者には一見納得いかない〈欲望〉に揺り動かされ、〈苦悩〉に激しく身をよじらせる。

その点から見ると、T・S・エリオットが『ハムレット』を失敗作であると論じていたことと同じ論法がバタイユの文学テキストにもあてはまる。エリオットによれば、ハムレットは自分の感情に相当する対象がないために困惑している。つまり、彼の嫌悪は母親によって喚起させられているにもかかわらず、その母親が、その嫌悪に匹敵しないので、その嫌悪を母親にぶつけるだけではどうにもならず、したがって、そういった感情を客観化できず、どんな行動も彼の感情を満足させることもできず、また、シェークスピアもどんな筋立てを用いても、そういったハムレットを説得的に表現することができず、したがって、シェークスピアはおのれの手で余

(17) Bataille, *Histoire de l'œil* (édition de 1923), *op. cit.*, p. 105.

(18) Bataille, *Madame Edwarda*, *op. cit.*, p. 327.

る問題を扱い破綻したというのである。

ところで〈欲望〉と〈苦悩〉の「客観的相関物」の無さをを小説家バタイユの技量不足としてではなく、バタイユの文学テキストの抱く本質的な特徴であると見なせないだろうか。そしてハムレットの〈苦悩〉がテキストにおいて心理的に「客観的相関物」を持たないという理由だけで『ハムレット』が失敗作であるというエリオットの評価そのものが、たとえテキストそのものにハムレットの〈苦悩〉の「客観的相関物」がなくとも、いや逆にないからこそテキストの余白から『ハムレット』は語られざる近親相姦をその中に秘めた物語と解釈することができると思なしたときに破綻するように、バタイユのテキストにおける根拠の不明な〈欲望〉に苛まれ〈苦悩〉に蝕まれる人々の描写には、逆にその根拠不明ということが積極的に指し示す意味があるはずだと考えても良いのではないだろうか。登場人物の〈欲望〉や〈苦悩〉にはそもそも根拠、理由が存在しないということ、つまり、自分自身でも分からない理由によって〈欲望〉と〈苦悩〉だけがやってくるということがバタイユの文学テキストに描かれていると肯定的に解釈するのだ。

詭弁だろうか。しかし、この論法はバタイユ自身が「内的体験」を論じるときに用いたものと同じである。「内的体験」とは、〈笑い〉の体験であり、〈恍惚＝脱存〉の体験は、現実世界の〈外〉に出る体験である。ハイデガーはこれを〈脱存〉と呼び、この体験が通常世界からの離脱であり、〈外〉を開いて通常世界を相対化する点に注目し、日常的な世界に「頹落」している現存在が「本来性」に目覚める契機としてみなし、いわば「可能事」の世界を励起させ強化するものとして自身の哲学体系に取り込んだ。それに対して、バタイユはこの〈脱存〉たる「内的体験」をいかなる哲学的な意味、宗教的教義とも切り離して、それらに決して従属させない。バタイユは「不可能事」に留まる。そうすれば「体験」は客観的にはただの「無意味な喪失」でしかない。しかし「体験」は〈あり〉、その強度はそれ以外のすべてを色褪せさせてしまう。そこでバタイユはこの無意味性を逆に積極的にとらえ、意味の秩序に還元できないものとして、この「体験」を肯定する。つまり、「体験」は生の無意味な過剰であるがゆえに、現実世界が意味に従属していることを逆説的に照らし出す。バタイユは「体験」をそうしたものとして担う。そして、「体験」をもたらす要因を考えたときに、〈過剰な力〉が想定される。この〈過剰な力〉によって〈欲望〉や〈苦悩〉などをかきたてられ、どうしようもなく翻弄される存在

こそ、人間であり、バタイユの文学テキストはそういった人間を文字通りそのまま形象化している(19)。

『わが母』の母エレヌも同じである。彼女のピエールに対する激しい〈欲望〉は「体験」と同じように「ある」。それが、〈法〉で禁止されているのなら、それは〈法〉の方が間違っている。彼女は〈法〉に挑む。ただし彼女の試みは英雄的な営みではなく、どうしようもない〈欲望〉を抱いてしまう自分がそれでも生きるための絶望的な営みである。

それでは、この〈過剰な力〉は『わが母』においてはどのように表象されているだろうか。

母は僕の知っている森の中の彼女であった。僕が彼女の手を取るとき、僕の前で彼女がバッカスの巫女に代わるのが、言葉本来の意味で狂った女になるのが分かった。僕は彼女の錯乱を分け持つのであった(20)。

母エレヌは息子ピエールを前にすると死とエロスの欲動の奔流に流され、生贖を貪り食らう「バッカスの巫女」に、「狂った女」になってしまう(21)。確かに禁止が強度を高めているとしても、フェードルが息子イポリットを愛してしまうのを避けられないように、母エレヌが息子ピエールを〈欲望〉するのは、自分自身によ

(19) こういった人間に対する透徹した認識こそがバタイユ思想において重要な問題の1つである。この問題はバタイユのあらゆるテキストを通して変奏される。

(20) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 811.

(21) ディオニソスの祝祭を背景としたキタイロンの森で狂気の母アガウエによって貪り食られるペンテウスの運命は、母の欲望の餌食にされる語り手ピエールの運命と重なり合い、『わが母』の基本的なモチーフになっている。ピエールの「母さんと一緒に森で暮らせたらなあ」という台詞に対して、母が、「だめよ。ピエール。わたしは1人で森を駆け回っていたのよ」(Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 797.)と答えることで、ピエールはペンテウスの運命を逃れる。「ディオニソスの森」での狂女たちは、理性によって限界づけられる以前の人間の姿を表象している。「ディオニソスの森」は近親相姦のタブーという文化的な法が成立する以前の〈過剰な力〉としての自然を示している。なお母エレヌの名は、パリシに誘拐されトロイ戦争の引き金となった、ギリシャ世界の性愛を代表するヘレナのフランス名であり、レアもまたギリシャの大地の女神の名である。

っても制御不可能な〈過剰な力〉によってである。この〈力〉に翻弄され、母は息子を誘惑し墮落させ、自分の世界に引きずり込もうとする。母の〈欲望〉は、その発生以降は、近親相姦の禁止によって逆説的に高められているだろうが、禁止そのものによって芽生えたものでもないし、また、欲望する主体をあらかじめ前提としているルネ・ジラルの提唱する他者の欲望の模倣としての欲望でもなく、主体の成立以前から、「内的体験」を発生させる〈外〉から、直接的に人間を揺り動かす〈欲望〉である。

ところで他の文学テキストとは異なり、『わが母』においては〈欲望〉の起源と関わる重要なトポスが設定されている。

森でのわたしの情欲以上に純粋な、それ以上に神聖な、強烈なものはほかにありませんでした⁽²²⁾。

母の言葉は、〈欲望〉の起源としての〈森〉について言及している。実際、13歳だった母エレヌは、〈森〉で〈欲望〉を解放し、全裸で馬に乗り、〈苦悩〉と官能の喜びに身を任せる。そしてピエールの父に陵辱されることで語り手ピエールを懐胎する。物語の起源となる出来事が生じたという意味で〈森〉は物語内容のレベルにおいて起源をなしている。したがって、一見すれば母を揺り動かす〈力〉の原因として〈森〉が挙げられるように見える。しかしなぜ〈森〉の中に入れば、「情欲」が、〈欲望〉が燃え上がるかについては物語には何も書かれていない。『わが母』の〈森〉とは、『死者』における〈森〉がエロスと死という〈欲望〉の転轍機⁽²³⁾であったのと似ていて、〈欲望〉を激しく燃え上がらせる触媒として存在するが、前にも見たように、結局「わたしの快樂は誰のせいでもなく、それはわたし一人から、絶えずわたしの神経を苛む自分の不均衡から生じる⁽²⁴⁾。」〈欲望〉は〈森〉において強度が高まるが、根柢なしに自らの中から生まれるのだ。

では母は〈過剰な力〉に対してどのように対峙しているだろうか。〈力〉によっ

(22) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 815.

(23) 神田浩一「〈喪の激しさ——G・バタイユ『死者』の謎について』『人文・自然研究』第3号、一橋大学大学教育開発センター、2009年、p. 247-307.

(24) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 815.

て人間が振り回されるということは、人間には主体性がないということの意味している。しかし、多くの人はそうは考えない。〈力〉の存在を無視して人間とは人間的なものであるという自己同一性の中に閉じこもろうとする。これこそが近代の人間主義的な考え方である。『わが母』の登場人物たちはすべてこの〈過剰な力〉を無視することはない。しかし各登場人物の〈力〉に対する接し方は違っている。その点母エレヌの特異性は際だっている。

一方レアはピエールの母を死にまで追いやった〈力〉に恐怖し、母の死後、〈力〉を直視することを避けて放蕩生活から足を洗い、最終的にはカルメル会修道院に逃げ込む。または〈力〉の牙を抜いて害のないように飼い慣らすという手段もあるだろう。日常の中で破滅しない程度に〈力〉を解放する。「立派な男性と結婚をし、幸せな、落ち着いた生活に恵まれた⁽²⁵⁾」アンシーがこのケースであろう。そうしたレアやアンシーに対して、エレヌは断固とした態度を守り抜く。〈力〉を直視し、錯乱の中でその極地に至る。それは日常の世界、「可能事」の世界に縮こまり、限界づけられて生きることにに対する積極的な異義提起である。まさしく「人間でしかないこと、人間から出ることができないこと、これは窒息だ、重大な無知だ、許し難いことなのだ⁽²⁶⁾。」ピエールの母は言う。「わたしがお前に恵む錯乱の短い一瞬は、世間の連中がその中で縮こまっている愚鈍の世界に果たしてひけをとるものでしょうか⁽²⁷⁾。」ピエールの母は、死の中で引き裂かれ、一瞬の閃光のような〈交流〉に燃え上がるパタイユの「至高者⁽²⁸⁾」たちのように、死の高みに自らを投げ

(25) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 809.

(26) Bataille, *L'expérience intérieure*, *op. cit.*, p. 179.

(27) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 851.

(28) アレクサンドル・コジューヴ (1902-1968) の講義を通じて、ヘーゲルを知ったパタイユの全思想的努力は、ヘーゲル思想の乗り越えにあったと言っても過言ではない。「承認をめぐる闘争」において、死を恐れなかった物が「主人」となり、死を恐れた者が「奴隷」となる。しかしその後転倒が起こる。「主人」は「奴隷」によって自分の欲求をすべて充たされる。その状態は欲求の即時的充足を生きる動物状態と変わらない。さらに「主人」にとって「奴隷」は承認の相手としてはふさわしくない。その結果、承認の相手を失った「主人」は自己意識を目覚めさせることができない。一方「奴隷」の方は「主人」の欲求を充足させるために、自分の欲求を一時断念しなければならない。こうして結局は「奴隷」が自己意識を目覚めさせる。これがヘーゲルの「主人」と「奴隷」の弁証法である。パタイユ

出し、「死を前にした歓喜の実践⁽²⁹⁾」を行う。死のトポスである〈森〉の女であるエレヌスにふさわしい身振りである。また、それは〈過剰な力〉が「死」という形で形象された『死者』（執筆 1943 年頃）で主人公のマリーが、愛する者の耐え難い死、避けられない自らの死に対して、自ら進んで無秩序と錯乱の中に身を投じるのと同じ身振りである。エマニュエル・レヴィナスの言うように、「希望は、死の瞬間に逝かんとする主体に与えられる余白そのもののうちにあるのだ⁽³⁰⁾。」

2. 誘惑と他者

〈過剰な力〉はどうしようもなく母を襲い、息子を〈欲望〉させるように仕向ける。その〈力〉に対して母は息子に対する〈欲望〉の強度を増大させ「最終地点まで行こう⁽³¹⁾」とする。具体的には、ピエールを挑発し、〈誘惑〉しようと試みる。母は美德の中にまどろみ、信仰の道に入ることすら夢想している息子、自分と価値観を共有していない他者に関わるための戦略として誘惑という手段に訴えかける。死んだ父の書齋を片付けるという仕事を言いつけ、その際に息子が淫らな写真を見るように仕向け墮落させたときの母の気持ちを見てみよう。

母は息詰まるような恐怖とともに嗜虐的にその仕事を僕にやらせる覚悟を決めたのである⁽³²⁾。

ずっと後になって母は、恐ろしかったことを、行きすぎたような気がしたこと

は「主人」を目指さない。承認をめぐる死を賭した闘争において、生き延びることによって、最後には「奴隷」に隷属するのではなく、バタイユが「至高者」と名づけた者は、死の中に果敢に飛び込み、死の中に引き裂かれる。そうすれば死を恐れなかった者、つまり死にゆく者と死に引き裂かれる者との間に「交流」が電撃的に成就される。

(29) Bataille, *Œuvres complètes t. I*, Paris, Éditions Gallimard, 1970, p. 552.

(30) Emmanuel Levinas, *Le temps et l'autre*, Paris, Fata Morgana, 1979, Paris, Presse Universitaires de France, Coll. «Quadrige», 1983, p. 57.

(31) Bataille, *L'expérience intérieure*, *op. cit.*, p. 47.

(32) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 774.

を打ち明けた(33).

彼女のこの「恐怖」は一体何に由来するのであろうか。確固とした悪の哲学を持ち実践している者には似つかわしくない狼狽ぶりである。この時だけでなく、母は自分のふしだらな性生活を、初めてピエールに打ち明けたときにも夫の突然の死による悲しみと酒の力と非常な勇気が必要であった。実は「恐怖」は誘惑に本質的に付きまってくる性質なのだ。ロラン・バルトは『恋愛のディスクール・断章』の中で次のように言っている。

自分の愛を証明したいと望むときにせよ、他者が自分を愛しているかどうかを
解読しようとするときにせよ、恋する主体には、自分の意のままに使うことの
出来るような、いかなる確実な記号体系も存在しない(34)。

〈過剰な力〉によって息子のことを〈欲望〉する母にとっては、「自分の意のままに使うことが出来るような、いかなる確実な記号体系も存在しない。」なぜなら悪の哲学の体現者である母エレーヌにとって美德にまどろむ息子ピエールは何の規則も共有しない、自己と「非対称的な他者」であるからだ。母エレーヌは自らを魅惑的な対象、意味を持つ対象として作り上げようとするが、意味を解読するのは他者の方であり、自分ではない以上、相手との間にコミュニケーションが成り立っているかどうかさえ全く確信をもつことが出来ない。母が働きかえる様々な行為の意味は、息子ピエールによって確定される。母にとっては一つ一つの行為が一種の賭けになる。母エレーヌの「恐怖」は誘惑に本質的に付随する〈賭け〉という性質に由来する。力によって相手を屈服させるのではなく、意味の確定を相手に握られている誘惑者は、場合によっては自分の弱さもさらけ出さなければならない。ピエールが「思想と感情の一致(35)」を信じていた母の真の姿に驚愕した後でも、母に対して「共犯意識(36)」を持つのは母が自分の弱点をもさらけだしたからだ。こうして

(33) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 774.

(34) Roland Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, Paris, Édition du Seuil, 1977, p. 253.

(35) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 761.

母エレーヌは誘惑によって息子に働きかける。冒頭から執拗に繰り返される「ピエール！」という呼び声は、セイレーンの呼び声のようにピエールを母の属する死と腐敗の世界に誘う(37)。

一方、息子にとって母の誘惑はどのような意味を持つだろうか。尊敬していた母にも放縱な生活があることを知った衝撃は、母が他者であることをはじめて痛感した経験になる。ジャン・ボードリヤールが述べるように、「誘惑されるとは自らの真理をそらされることになるのだ(38)。」その後ピエールは、母の行為と発言がはらむ意味を必死に読み取ろうとし、自己を変えていきながら、母の〈欲望〉を模倣しようとする。ピエールにとっても母は他者なのだ。

この母の〈誘惑〉の試みは、「無分別な愛は、もっと無分別な愛の方へ行くという形でしか意味を持たない(39)。」という『有罪者』(1944)の「ディアヌスの教理問答」の教えを忠実になぞるように「最終点まで行こう(40)」とする。ピエールと母の関係はそこで次々と変貌していく。まずは、無法な父の存在によって虐げられる(とピエールには思われていた)若くて美しい母と、その母に対して「思想と感情の一致」があると信じて疑わず、盲目的に母を慕う息子とその母との関係。次には、父と同様に奔放な性生活があること知ったときに、ピエールにとって、母は一人の女に変貌する。男と女の関係。この〈母〉から〈娼婦〉という変化は女性の典型的な2つのイメージのドラスティックな変化であり、ピエールによって執拗に反芻される母の「優しさ」と「淫らさ」を象徴する2つのイメージは母エレーヌにおける母性と娼婦性に差し向けられている。さらに、極限において二人はお互いにかけてえのない一対の男女の関係になる。それが電撃的に成就されたのちに、最後に、死にゆく者と死を見届ける者という人と人の差異を根源的に露呈させる関係へと二人はなだれこむ。近親相姦という設定は、〈過剰な力〉によって翻弄される人間のすべての関係の可能性を網羅する。そこに母と息子が愛し合うという設定が

(36) Bataille, *Ma mère*, op. cit., p. 776.

(37) 「ピエール！」という呼び声は、死の呼び声となった。(Bataille, *Ma mère*, op. cit., p. 393.)

(38) Jean Baudrillard, *De la séduction*, Paris, Édition Galilée, 1979, Folio, 1992, p. 112.

(39) Bataille, *Le coupable*, op. cit., p. 402.

(40) Bataille, *L'expérience intérieure*, op. cit., p. 179.

用いられた深層の原因がある。

3. 誘惑の果て——差異の露呈と死の分かち合い——

〈誘惑者〉と〈被誘惑者〉の関係が頂点に達したときに何が起こるだろうか。次の文章は、物語の結末部分で母と息子が最後の禁止を今まさに超えようとする瞬間に母が息子に向かって語る場面、エロスと死が激しく融解し文句なしに物語の絶頂をなす場面である。

「接吻して」僕に向かって母は言うのだった。「もう何も考えないで、[ここに
お前の指をお入れ。すぐにお前はこれの中に飛び込んでくるでしょう。これを握
らせておくれ。] わたしの口の中にお前の口をお入れ。今この瞬間に幸せになる
のです、わたしが墮落していることは、わたしが破滅していることは忘れな
いさい。わたしがその中に閉じこもっていることをすでにお前が感づいている、
死と腐敗の世界にわたしはお前を入らせたいのです。お前がそれを好きになる
のは分かっていました。今すぐに一緒に狂って欲しい。わたしの死の中にお前
を引きずり込みたい。わたしがお前に望む錯乱の短い一瞬は、世間の連中がそ
の中で震えている愚鈍の世界に果たしてひけをとるものでしょうか。わたしは
死を望んでいます、《背水の陣をしきました。》お前の墮落はわたしの仕業でし
た。自分が持っている一番純粹で強烈なものをわたしはお前に与えたのです。
つまり自分から衣を剥ぎ取ろうとする者しか愛すまいという気持ちで。今度が
最後の衣です。」

僕の目の前で母は下着とブロースを脱ぎ取った。裸でベッドに横たわった(41)。

母エレーヌの台詞の内容をまとめると、自分の属する世界と世間の人々が属する世界という対立する2つの世界の呈示と、自分の世界へ息子が参与することへの懇願になるだろう。母の属する「死と腐敗の世界」では「忘却」や「狂気」が要求され、また何よりも「瞬間」の強度が礼賛され、世間の人々が属する世界は「愚鈍

(41) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 851.

の世界」として嘲笑される。そして母エレヌの、死を賭した懇願からうかがえるように、母の世界では人と人の十全な交わりが求められる。

母が息子に贈与する「自分から衣をはぎとろうとする者しか愛すまいとする気持ち」における「衣」は何を意味するだろうか。「衣」は人を動物から隔てる。したがって「衣をはぎとる」とは、何よりも理性によって限界づけられた人間の世界を離脱し、〈過剰な力〉の世界である動物の世界に回帰することへの誘いになる。また「衣」は人と人とを直接的な交わりから隔てるものであり、「衣をはぎとる」とは、隔てのない交わりを求めることになるだろう。さらに最も象徴的な意味に解せば、「自分から衣をとる者しか愛すまい」とするのは、自己同一性の中にまどろむ自己を離れて全く異質な他なるものとコミュニケーションをはかろうとする貪婪な意志を表明していることになろう。ところで普通に考えられているコミュニケーションが一貫した関係の網の目を形作り、その結節点に安定した主体を析出させるのに対して、〈誘惑〉という〈他者〉への働きかけにおけるコミュニケーションはそういった安定した場や主体を危機にさらす。そういったコミュニケーションこそがバタイユの言う〈交流〉である。それをバタイユ以上にバタイユらしい表現でまとめ上げたジャン・ミシェル＝レイの言葉を見てみよう。

すべての交流は、裂け目、自分の外に出ること、外在性、外在性への主体の「喪失」を必要としている。それは破壊と死の基礎の上で実現される。(供犠と性活動はその特権的な例である。)交流への道、いっさいの言葉の彼岸での絶頂への到達が可能となるのは、存在の、私の存在の、「他者」の存在の完全性を賭けることによってだけである(42)。

母エレヌと息子ピエールは、お互いの欲望を極限まで燃え上がらせ〈交流〉しようとする。母は十全なる〈交流〉を求め、最後には「存在の完全性をかけることによって」自らを供犠にかける。そのとき「燃え上がる炎、落雷における放電に比べられる」完璧な〈交流〉が出現する。ここに十全な〈交流〉を求める母の貪婪な意志を見て取るのはたやすい。この激しさが母とピエールの愛と、アンシーとピエ

(42) Jean-Michel Rey, «La mise en jeu», *L'ARC*, n 32, 1967, p. 48.

ールの愛を決定的に隔てる。「優しさの王国⁽⁴³⁾」であったアンシーとピエールの愛は幸福に満ちているが、母のように「理性で調整されなければ、死に到達する欲望を克服することは不可能である⁽⁴⁴⁾」とは考えないアンシーには、〈過剰な力〉の恐ろしさは分からないし、決して人間の限界を超えた〈不可能〉という極限まで至る〈交流〉を求めようとはしないだろう。バタイユは『有罪者』(1944)の中で次のように述べている。

愛人たちは互いに引き裂き合うという条件のもとでお互いに出会うのだ。二人とも苦痛に乾いている。欲望は彼らにおいては、不可能を欲望しなければならない。そうでなければ、欲望は満たされてしまうだろう。欲望は死んでしまうだろう⁽⁴⁵⁾。

アンシーに対するピエールの〈欲望〉は「不可能を欲望する」母の〈欲望〉の前では「死んでしまう」しかない。したがって、アンシーには完璧な〈交流〉を望むべくもない。だが、〈交流〉とはどのようなものなのか。「裂け目、自分の外に出ること、外在性、外在性への主体の『喪失』」によってなされることから、人は〈交流〉を主体の喪失による個と個との融解による〈合一〉と考えるかもしれない。特にキリスト教における神々との〈合一〉を範とするような、愛する者同士の〈合一〉が起こるように思われるかもしれない。さらに母エレーヌが激しく渴望している「今すぐ一緒に狂って欲しい。わたしの死の中にお前を引きずり込みたい」という〈欲望〉もこの〈合一〉を求めていると見なせるかもしれない。しかしそうではない。母エレーヌは先の台詞の前にこう言っている。

「お前はわたしを知りません。わたしに到達できませんでした⁽⁴⁶⁾。」

苦い認識である。立脚する空間の違い⁽⁴⁷⁾によってテキストの構造のレベルでも

(43) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 812.

(44) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 810.

(45) Bataille, *Le coupable*, *op. cit.*, p. 403.

(46) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 851.

表現されていた自分とピエールを隔てる差異を母は明確に意識している。母はピエールと〈合一〉することを欲しているのではない。母は己の孤独を十分に認識している。

「今から目に見えています。お前が生き延び、生き延びることによって忌まわしい母を裏切るのが⁽⁴⁸⁾。」

イエス・キリストが明け方に鶏が鳴くまで自分のことを三度否認するだろうと聖ペテロ（ピエール）に予言したように、母はピエールの「裏切り」を告げている。〈合一〉は求められていないし、〈合一〉はない。それでも、「死の中までお前に愛されたいと思い」ピエールを激しく求めてしまう母エレヌ。物語を通底する母の〈苦悩〉は決してピエールを求めながらも、禁止によって得られないという欠如からきているのではない。他人だけではなく自分自身にも理由が分からないまま直接的に襲ってくる〈苦悩〉や〈欲望〉こそ人間の条件なのだ。そして、〈過剰な力〉になすがままであるのが人間の条件であるならば、ある個体の〈苦悩〉はその個体だけのものではなく、〈分かち合われる⁽⁴⁹⁾〉べき普遍性を持つ。

「わたしはお前を愛しておりません。やはり一人ぼっちです。でも、消え去った叫び、それがお前には聞こえるのです。いつまでも聞こえ続けるでしょう⁽⁵⁰⁾。」

「でも、自分の心をまた、お前をわたしは自分の快樂から、お前の快樂を区別

(47) 徹底した室内劇である『わが母』において1つだけ特権的な外部空間がある。それは〈森〉である。〈室内〉が、ピエールによって語られ、到達可能な空間であるのに対して、〈森〉はピエールの母、レア、アンシーによって、彼女たちが興奮状態に達したときに語られ、ピエールにとっては到達不可能な空間となっている。

(48) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 851.

(49) Jean-Luc Nancy, *La communauté désœuvrée*, Christian Bourgois Éditeur, 1986 et 1991.

(50) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 815.

することができるでしょうか⁽⁵¹⁾。」

〈合一〉はなく、母は「やはり一人ぼっち」である。しかし、その孤独な母の悲鳴は、ピエールには「いつまでも聞こえ続ける」のだ。母の死はその悲鳴によってピエールに支えられている。母の死後もピエールは母の死をその身に内包して生きる。また、母にとってピエールとは、自分の孤独を決して分かちもたない全くの〈他者〉でありながらも、その一方で「自分の心」や「自分の快樂から区別できない」ような親近性を持った〈他者〉として認識されている。矛盾だろうか。そうではない。この母の人との距離の取り方は見かけほど奇矯なものではない。差異の認識と親密さの混ざり合ったこの極端な距離の取り方は、「友人たちは私から逃げていく。私は恐怖を与えるらしい。別に騒ぎ立てるわけではないのだが、私はみんなを平和にしておいてやるができないのだ⁽⁵²⁾」と語ったバタイユ自身と同じである。「森の子、未曾有の官能の果实⁽⁵³⁾」であるという事実が圧倒的に母のピエールに対する親近性の度合いを高めているとはいえ、絶対的に孤独によって引き裂かれ、それを補填するようないかなる超越も存在はしないが、それぞれの孤独という条件を普遍的に備えて〈分かち合っている〉というのがバタイユの考える人の在り方であるからだ。つまり、絶対的に孤独であると同時に、決して一人ではないという奇妙な条件が人を形作っている。

結局、〈誘惑〉の関係に基づく二人の関係は、〈合一〉や〈融合〉ではなく、常に自己の超出と自己に回収されない全くの他なるものとしての〈他者〉と向かい合う非対称的な関係となる⁽⁵⁴⁾。そして、その非対称的な関係が最もあらわになるのが、

(51) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 814.

(52) Bataille, *L'expérience intérieure*, *op. cit.*, p. 54.

(53) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 814.

(54) スピノザの議論に想を得て、モーリス・ブランショは人間関係を三つに分類している。「第一の働きにおいては、同じものの法が支配している。人間は統一性＝一体性を欲しているのだが、分離を確認する。他のものが、他の事物であっても、誰か他の者であっても、人間はそれを同一のものにするように務めなければならない。」「第二類の関係は、私にはそう思えるのだが次のようなものだろう。統一性はつねに要請されているが、即座に＝無媒介的に獲得される。〔中略〕それは、完全に合致するという関係や参入＝融即するという関係であり、ときには無媒介

先に見た物語の最後の母の死の場面である。

「わたしは死を覚悟しています，《背水の陣をしきました。》」という母は死んでいく。しかしながら、死んでいく者は、自分一人では自分の死を死ぬことはできない。なぜなら「死はある意味では、不可避な出来事であるが、深い意味では接近不可能なものである⁽⁵⁵⁾」からだ。死は死んでいく者を無限に離れていく。そして母の死を看取るピエールは母から死を受け取りながらも、絶対に母に取って代わることはできない。これこそ死の持つ絶対性である。ここには絶頂に至った非対称性がある。しかしこの死の高みにおいて、死ぬ者と死を看取る者である二人は、この決定的な差異を〈分かち合う〉。そして、この〈分かち合い〉こそが〈合一〉という個と個の弁証法とは異なった、「燃え上がる炎に、落雷における放電に比べられる」という完璧な〈交流〉の一瞬が開示される。この〈交流〉をバタイユは次のように考えていた。

だが一体誰が死ぬまで笑ったりするだろうか（こんなイメージは間違いじみている、私にはこれ以外のイメージは持てないのだ⁽⁵⁶⁾）。

そして、この「間違いじみた」イメージこそ〈過剰な力〉を直視し、それによって翻弄されながらも極限まで生き抜いた母に最も相応しいイメージである。母は死を前にした最後の台詞で次のように語る。

的な結合という方法で獲得される。〈自我〉と〈他なるもの〉はお互いのうちに自分を失う。例えば、脱自、融合、享受がある。」それら2つに対して、第三類の関係では、「関係を『基礎づける』もの、とはいえ関係が基礎づけられないままにそれを『基礎づける』のは、もはや近さではない。すなわち、戦いの、奉仕＝仕事の近さ、本質の、認識や承認の近さ、ひいては孤独の近さではなく、私たちの疎遠性＝異邦性である。こういう疎遠性＝異邦性は、それを分離として、隔たりとしてさえ、特徴づけることではまったく充分ではない。」(Maurice Blanchot, *L'Entretien infini*, Éditions Gallimard, 1969, p.94.) エレーヌとピエールの関係は、恋人たちの幸福な合一に向かうのではなく、共有するものをもたない他者に対峙する限りにおいて、第三類の関係に属するだろう。

(55) Bataille, *L'expérience intérieure*, *op. cit.*, p. 86.

(56) Bataille, *Le coupable*, *op. cit.*, p. 346.

分かっているでしょう。わたしは笑うのが好きだった。もしかするとまだ笑い納めではなくてよ。いまわの際まで、お前のことを笑い出さないとも限りないわよ⁽⁵⁷⁾。

バタイユは笑いについて次のように述べている。

笑いは不可能の中への可能の跳躍だ——可能の中への不可能の跳躍でもある。しかし、それは跳躍でしかないのであって、それを維持しようとするのは、不可能を可能に還元することだし、またその逆でもある⁽⁵⁸⁾。

ピエールの母エレーヌは、決して「不可能を可能に還元し」たりはしないだろう。「不可能」の中へ跳躍したまま、その激しい生の軌跡を燃え上がらせる。

(57) Bataille, *Ma mère*, *op. cit.*, p. 852.

(58) Bataille, *Le coupable*, *op. cit.*, p. 346.